

○菌学者コーナーさんの思い出 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Dr. E. J. H. Corner and I

私がコーナーさんと初対面したのは江の島の海中であった。昭和41年8月22日から9月10日まで、東京で太平洋学術会議が開かれた際のエキスカージョンの折りであった。同じ会議に参加したシンガポール植物園の張女史も同席して、旧知の間柄でもあってさっぱりした気持ちで四方山話に花を咲かせることが出来た。私はこの折に欧州人には珍しかろうと思い、江の島のシイにつくマユハキタケを紹介したが、意外にも彼はシンガポールでも見られると話して呉れた。成程彼は戦時中シンガポール植物園に副園長として勤務して居ったのだと気がついた。

さて日本軍が破竹の勢でシンガポールに攻め入り、例の山下将軍がイエスカノーかと談判の末、パーシバル将軍が降伏したのが昭和17年2月15日午前3時のことであった。当時、コーナーさんはシンガポール植物園のみでなく附属博物館、図書館、おし葉庫なども管理していた。今後日本軍の占領下で、これらを無事に保存することが彼の最大の関心事であった。

こんな非常時に、しかも生まれてはじめての屈辱の場面に在って、自らの生命よりも世界共有の文化財に思いを致し、適切な方法はと苦慮した彼の心情は察するに余りある。

それから間もなく日本側の自然科学者の一行が、徳川義親侯を団長としてこの地に乘込んで来た。植物関係では郡場寛 (シンガポール植物園長)、日野巖 (ピナン植物園長)、羽根田弥太 (シンガポール植物園長) など、その他、動物の古賀忠道、江崎悌三、地学の田中館秀三の諸氏であった。なおジャワのボイテンゾルフ植物園には中井猛之進司政長官の許に、豊島恕清、大井次三郎、佐藤正己の諸氏が園の管理に当たった。

さて此処 (昭南島と改名) ではコーナーさんはお役御免になったが、従来通り生活し、研究を続け、また文献の蒐集、標本の整理などをすることが出来た。山下将軍の配慮によった由である。斯様な生活を捕虜の期間中続け、日本側の敗戦の年に故国へ引上げたのである。

コーナーさんはケンブリッジ大学の探険部の部長を永年つとめて居り、1961年には北ボルネオのキナバル山 (13,455 ft.) 探険隊の隊長として活躍された。その報告書は私がこの山に登る際に大いに役立った。また私が北極園のスビッツベルゲンで単独調査を行った際に、丁度同大学の探険隊が居合わせ、その隊長はコーナーさんが有能な学者であり、且つ探険家であると話していた。同大学には往年の南極探険隊長スコットの遺品などを集めた博物館がある。しかし有名な遺書はここにはなく、ロンドンの大英博物館に飾られてある。

1971年にイギリスのエクゼターで第一回国際菌学会議が開かれた際に、彼は出席して居らなかったもので、私はケンブリッジ郊外の自宅を訪れた。彼は自国で会議が開かれるにも拘らず出席せぬという変わり者であったが、私もどうやら同類らしいと見えて意気投

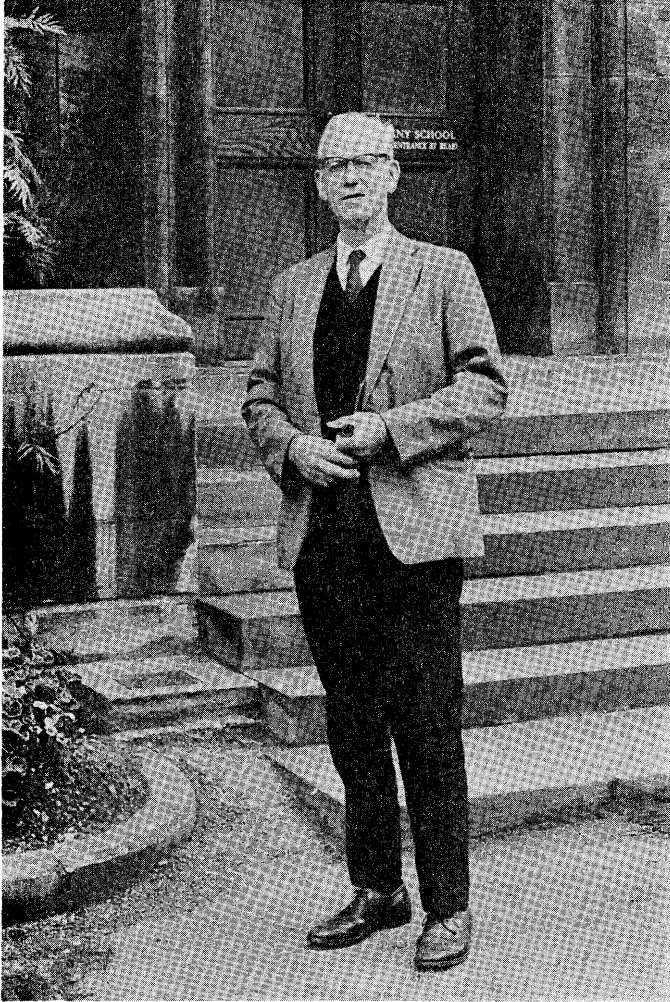


図 1. ケンブリッジ大学植物教室前のコーナーさん。

合する訳であった。彼の居間には郡場教授の写真が飾られてあり、この前で大いに話はずんだ。

自宅には南北に並んだ2つの研究室があり、南側で顕花植物を、北側で菌類を研究するという仕組みになっていた。丁度、具原益軒が損軒、益軒を兼有して居った故事にならった訳でもなかろうが。前庭は比較的狭かったが、後にまわると見渡すかぎり芝生や

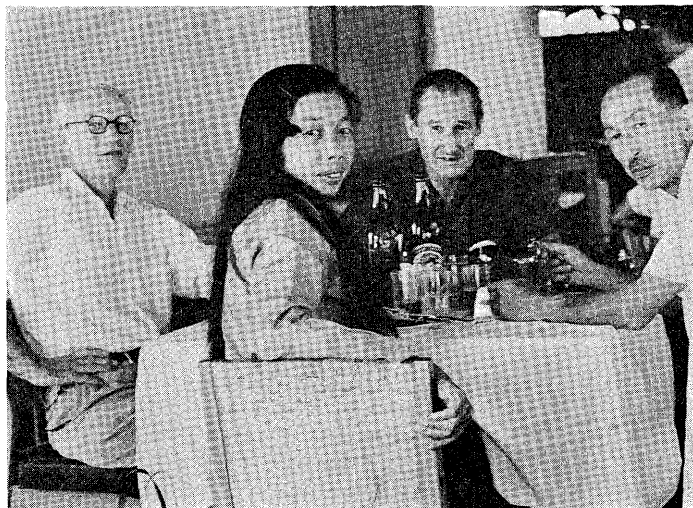


図 2. 江の島に於ける一行。左よりコーナーさん、張女史、一人置いて小林。

菜園などが続き、晴耕雨読には持って来いの処に見えた。渡辺清彦さんの著作「熱帯植物図集」の校正を頼まれたが、あれはどうなったかと心配顔であった。

戦後に彼は私と前後してニューギニアやソロモン諸島の菌類調査を行った。また東南アジアの菌類に関してはホウキタケ科、ベニテングタケ属、多孔菌類、カワキタケ属、アンズタケ類など広い分野の論文や単行書を出して居るし、高等植物に関しては、南の研究室での業績と思われるヤシ科植物や路傍植物の書など、その研究分野は限りなく広い。

ここに面白い話があるので紹介して置く。それは *Apologia pro monographia sua secunda* という題名の小篇である。某氏より彼の発表した菌について疑問の点を指摘されたので、それに対する弁解を記したものであった。熱帯の菌を研究するに当たっては、飽くまで現地でその生態を観察することが肝要であるとの主旨であった。また菌類の子実体を研究する場合に、その生殖器官と同様に組織をよく観察する必要があると主張し、論文には多くの組織図を載せて居る。

コーナーさんに対する思い出は尽きそうにない。戦後37年経たいま、山下將軍は死刑、徳川侯、郡場教授、江崎教授、ジャワでは中井、豊島、大井の諸氏がすべて他界して仕舞った。出来るならば、本年東京で開かれる第3回国際菌学会議に出席され、友情を更に深めたいと思う。

嘗って東京の御徒町の店でコーヒーを啜りながら、彼は問わず語りに、幼年時代に菌学に志したのは、パークレイの小さな書物の影響によるものだと話して呉れた。

昨年、コーナーさんは戦時中の日英友好の記念として“*The Marquis: A Tale of Syōnan-to*”という随筆を出版した。最近、石井美枝子さんによってこれの訳文が出版された（中公新書 1982）。その巻頭に次の文が載っている。

当時をふりかえるたびに、私はいつも次のような詩を想起こします。

‘Of mercy, courage, kindness, mirth.

There is no measure upon earth.

Nay, they wither root and stem

If an end be set to them.’

E. J. H. Corner

昨今戦争の悲惨な思い出の記事が相次いで伝えられ、気の滅入る毎日であったが、それだけにこのさわやかな思い出は私共を強く力づけて呉れるのである。

(国立科学博物館)

○新変種ハハジマノボタン (豊田武司) Takeshi TOYODA: A new variety of *Melastoma tetramerum* Hayata from the Isls. Ogasawara

小笠原のノボタン属植物については、1905年に服部広太郎氏が父島の武田牧場（現在

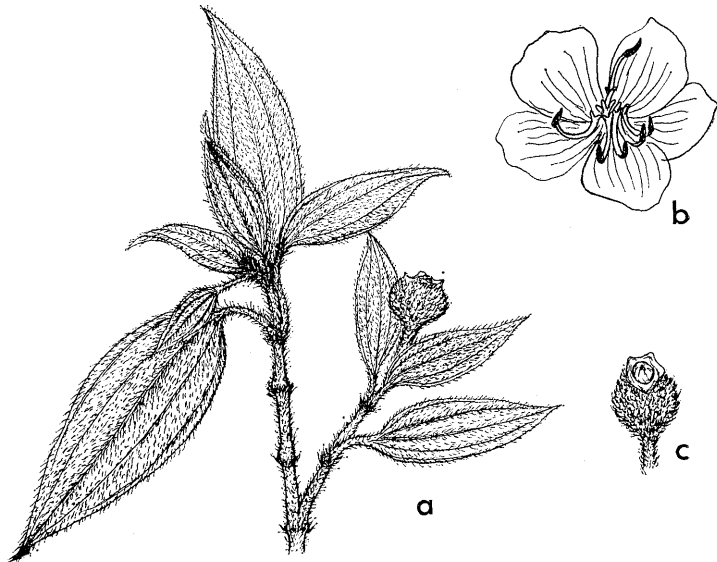


図 1. ハハジマノボタン *Melastoma tetramerum* Hayata var. *pentapetalum* Toyoda.
a. 果実をつけた枝. b. 花. c. 果実. $\times 2/3$.